

表記体・用字と文脈・用語との関連

—今昔物語集宣命書きの中の特例に及ぶ覚え書—

山 田 俊 雄

一、は し が き

二、主題の意味——統紀宣命の場合

三、対蹠的な場合——かな文における漢字の混入

四、本 論——今昔物語集天竺・震旦の部の宣命
書きの特例の場合

一、は し が き

本稿において実証的に取扱ふ問題は、今昔物語集天竺・震旦部において、大字で、かたかなで書かれてゐる部分のうち、いはゆる概念語の根幹とみられるものの、語の性質についてに限られる。ここでいふ語の性質は、結論でのべるべきことであるが、時代性・雅俗の区別・文脈上の帰属等をさしてゐるのであつて、文法論的な問題に言及するものではない。

い。いふならば、むしろ、題目のごとく用語や文脈と、その表記法・用字法との関係といふ課題を処置してみようといふわけである。

今昔物語集が、原形においては、漢字かたかな交りの宣命書きの表記体をもち、それが平安朝末期に属する宣命書きの逸品であり、屢々代表的作物の如き取扱ひを受けて来たことは、多言を要しないところである。而して、その集が本朝の部、すなはち巻第十一以下巻第三十一までの諸巻において、さらには、その世俗の部について、格別の評価を受けてゐることは確かである。しかしながら、天竺・震旦の両部はさしたるものではないといふ俗説も、最近は流布してゐること故ここに、本朝の部をさし措くについては、多少の弁明も必要であらうか。右にいふ俗説は、今齒牙にかけられるだけのことを含むものとは見えない、すでに文学といふ用語にして多義を

免れない、さしたるものであらうが、なからうが個々の嗜好に帰する体の論ならば取上げるには及ぶまいと思ふ。

本稿では、今昔物語集の用字法の調査を主眼とする。物語の内容たる言語と、その容器たる文字との連関は、すでに歴史的に一つの傾向があると認められてゐて、そのためにまた諸種の問題が解明の端緒を得てゐる。今、この集について、便宜、天竺・震旦の部を先づ処置し、つゞいて、同様に本朝の部に及ぼうとするのみである。それは、巻の序次を逐ふといふ理由である。しかしもう一つは、言語史的にみて、本朝の部については、前二部と別に取扱ふことが必要と考へられる理由が認められ、したがつて、本稿の場合にも、主題は同時に設定せられるが、処置は、それぞれ別に行ふべきものであるからである。予測するに、主題に関しては、本朝の部には同一の結論は成立すると限らないのである。

二、主題の意味

——統紀宣命の場合——

さて、右にのべた、本稿の主題が、文字・言語の歴史の上で、どのやうな意味を有するかについて、聊か注釈を与へて置く必要を感じる。

漢字を主とし、仮名を従とする言語表記の方式は、日本語を文字化する場合、現在標準的なものであることは、いふまでもない。また過去に溯つても、この方式は多くの場合に採用されたところであつて、特に、いはゆる宣命書きにおいて

は、漢字と仮名（または真仮名）の役割の主従関係は、著明な通則的事実として認めることができる。そこでは、主たる漢字が分担する語の性質と、従たる仮名の分担する語の性質との間に、かなり、際立つた差違がある。漢字を多く布置した間を、かたかなをもつて点綴するといふ趣向は、用語の性質を暗黙のうちに、読者に領會せしめ、句読を容易ならしめる。用語と用語との間を視覚的に区切ることは、他の手段（たとへば分ち書き——分別書き方——や引用符や句読点・段落の類）を不必要なものとしてゐた。

さて、右にいふやうな表記の方式は、早く、漢字専用の時代に採用されて、後宣命や祝詞に主として伝はり、或る種の系統の散文に（ごく稀には韻文にも）決定的に便宜なものとして伝承されたやうに推測されるのである。今、今昔物語集を見ると、上代の宣命書きの、嫡々の後裔としてその表記の方式を位置づけることができるかどうかは、暫く措くとしても、従来いはれるやうに、宣命書きの好個の実例と見ることには、疑義はないと思はれる。即ち、概念語の中心部を漢字によつて大字で、しかも殆ど例外なくどの概念語についても表記すると同時に、反面では、関係辭の殆どすべてを、そっくり仮名で小字で、表記する、といふ方式が、今昔物語集における実況から帰納せられるのである。

しかし乍ら、祝詞や宣命の、いはゆる宣命書きとても、かなりの例外といふべきものを含んでゐるのであつて、嚴格にいへば、首尾一貫したものと断定はできない。表記者が單一

でない場合には、当然のこととして多少の弛緩が生じること
もあらう。また、語の性質の認識において、不十分な面が、
混入して来る場合には、自然に、右の方式は破綻を見せるわ
けであつて、この点は柔軟に表記者の立場を顧慮するだけの
余裕ある解釈を行ふべきものであらう。

もともと、宣命書きとは、本居宣長が「歷朝詔詞解」総論
において概述したところでもあるが、山田孝雄「国語学史」
(三四頁)に

「宣命書とは古の詔勅の国語にて宣言せられたるものを、漢字
にて記載せるものにして、その書式には略一定の方式あるもの
なり。その概念をいへば、大体に於いて觀念をあらはす語即ち
体言、副詞並に用言の本幹は大字を以て書き、用言の活用、複
語尾、助詞の如きを小字にて書くといふ記載の方式なり。」

とのべるやうな事柄をさしてゐるので、(もちろん、この呼
称は宣命の制作された当初のものではあるまい)大字の部分
には仮名で表記することも稀ではなかつた。

天皇御子之阿礼坐牟弥継継尔

(第一詔)

多利麻比氏夜々弥賜閑婆

(第二詔)

弥務尔弥結尔阿奈々比奉

(第三詔)

人祖乃意能賀弱兒乎養治事乃如久

(第三詔)

*地坐祇乃相于豆奈比奉福波倍

(第四詔)

吾孫将知食国天下止与佐斯奉志麻爾々々

(第五詔)

高天原尔事波自米而

(第五詔)

天下所知美麻斯乃父止坐天皇乃、美麻斯尔賜志

(第五詔)

可久賜時尔美麻斯親王乃齡乃弱尔

(第五詔)

佐太加尔牟俱佐加尔

(第五詔)

豐尔牟俱佐加尔

(第五詔)

吾子美麻斯王尔

(第五詔)

許能天高御座坐而

(第六詔)

加久耶答賜、加久耶答賜止

(第六詔)

於毛夫氣賜答賜

(第六詔)

于都斯久母皇朕政乃所致物尔在米耶

(第六詔)

相宇豆奈比奉福奉奉事尔

(第六詔)

由見其婆婆止在須

(第七詔)

加久定賜者

(第七詔)

必母斯理弊能政有倍之

(第七詔)

刀比止麻尔母己我夜氣授留人乎波

(第七詔)

十日廿日止試定止斯伊波婆

(第七詔)

許貴太斯伎意保伎天下乃事尔夜

(第七詔)

多夜須久行無止所念坐而

(第七詔)

女止云波姿等美夜我加久云

(第七詔)

淨伎明心乎持氏波波刀比供奉乎

(第七詔)

其人乃字武何志伎事欺事乎

(第七詔)

今米豆良可尔新伎政者不有

(第七詔)

武都事止思坐故

(第八詔)

神奈我良母所念行久止

(第三詔)

加久治賜比惠賜來流

(第三詔)

仏大御言之国家護我多仁波勝在止

(第三詔)

衆人乎伊謝奈比率氏
相宇豆奈比率
佐枳波倍率利
拙久多豆何奈伎朕時尔
神奈何良母念坐氏奈母
退氏波婆婆大御祖乃
神奈我良母念坐須
婆婆尔仕奉尔波可在
伊蘇之美 宇牟賀斯美
男能未父名負氏女波伊婆礼奴物尔阿礼夜
父我加久斯麻尔
於母夫氣教祁牟事
天皇朝守仕奉事願奈伎人等尔阿礼波
能杼尔波不死
伊夜嗣尔奈賀御命聞看止
神我天神地祇乎率伊左奈比天
障事無久奈佐牟止
加遍須加遍須所念止母
己已太久高治賜乎
加蘇毘奪將盜止為而
惠逆在奴久奈多夫礼麻度比
逆党乎伊射奈比率而
此事俱仁西止伊射奈布尔依而
俱仁西牟止事者許而

(第三詔) (第一九詔) (第二三詔) (第二四詔) (第一五詔) (第一四詔) (第一三詔) (第一二詔) (第一一詔) (第一〇詔) (第九詔) (第八詔) (第七詔) (第六詔) (第五詔) (第四詔) (第三詔) (第二詔) (第一詔)

穢奴等乎伎良比賜棄賜布尔依氏
久奈多夫礼尔
加久聞看來天日嗣高御座乃業波
相宇豆奈比率
掛畏朕婆々皇太后朝尔母
如理婆々尔波仕奉倍自止
生子乃八十都岐尔自
伊夜益須益尔
波良何良尔至麻氏尔
伊可尔可忍久
多比重氏宜久
伊奈備奏
我加久不申成奈波
加久為流
婆々止奈母念
於母自岐人乃自門波
字牟我自尔辱弥念行尔
加久氏
加久為氏
今帝止立氏須麻比久流聞尔
宇夜宇也自久相從事波元之氏
斗卑等乃仇能
凡加久 伊波流倍枳
自加得言也

(第一九詔) (第二三詔) (第二四詔) (第二五詔) (第二六詔) (第二七詔) (第二八詔) (第二九詔) (第三〇詔) (第三一詔) (第三二詔) (第三三詔) (第三四詔) (第三五詔) (第三六詔) (第三七詔) (第三八詔) (第三九詔) (第四〇詔)

加久言良之止

伊等保自弥奈母念須

加久能 先仁捨岐良比賜天之

進都可方須己止

多夜須久

髮乎曾利天

帝乃出家之天伊末須世仁方

樂末須位仁方阿良称止毛

*冠位阿氣賜

*天下方朕子伊末之仁授給

奈壳久在牟

此年己呂見仁

*六千乃兵乎發之等等乃比

如是在事阿麻多太比所奏

於多比仁在止

猶天乃由流之天

人人己比岐比岐

人乎伊佐奈比須々牟己止莫

可仁可久仁止

事奈久之天

可久賜故方

宇治方夜伎時仁

(第二七詔)

()

()

(第二八詔)

()

()

()

()

(第二九詔)

()

()

(第三〇詔)

()

(第三一詔)

()

()

()

(第三二詔)

()

()

己可心乃比岐比岐

人仁毛伊佐奈方礼須

人平毛止毛奈方須之天

於乃毛於乃毛

佐良仁帝止立天

天地乃宇倍奈弥

可久方阿礼止毛

思和久事毛無之天

罪奈比給岐良比給止

可多良比能利多布言乎

必不敢伊奈等宜多方牟止念之天奈毛

大新嘗乃猶良比乃

為夜備末都利

於多比仁侍天

赤丹乃保仁 多末倍惠良伎

伊末志家利

父我可多母我可多能

志乃比己止乃書尔

必異奇驗乎阿良波之授賜物尔伊末志家利

別好久大末之末世波

特尔久須之久奇事乎

(第三三詔)

()

()

()

()

()

(第三四詔)

()

()

(第三五詔)

()

()

(第三六詔)

()

()

(第三七詔)

()

()

(第三八詔)

()

()

然此乃尊久字礼志岐事乎

心波定天伊未須

可久波阿礼止毛

和佐止之天奈毛

不奈伊未佐倍止奈毛

朕我太子等坐之時余利

可多自氣奈弥奈毛

根可婆称改給比治給伎

岐多奈久惠奴止母止

岐良比給氏之

岐多奈伎佐保川乃髑髏爾入氏

岐良比給倍久在利

其等我根可婆禰替氏

政波行給物尔伊麻世波奈毛

於太比尔侍氏

己我比伎婢企

退給比捨給比岐良比給牟

許己知天謹麻利

於保世給布御命乎

然朕波御身都可良之久於保麻之麻須尔依天

汝都可弊止敕比之御命乎

先乃人波謀乎遲奈之

我方能久都与久謀天

新嘗乃猶良比乃豐乃明聞許之亮須

(第四一詔)

〃

〃

〃

〃

〃

〃

(第四三詔)

〃

〃

〃

〃

(第四四詔)

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

(第四六詔)

有礼志与呂許保志止奈毛見流

惠良伎

相宇豆奈比奉相扶奉事尔

天皇朝乎置而罷退止聞看而於母富佐久

於与豆礼加母

多波許止乎加母云

誰任之加母罷伊麻須

孰授加母罷伊麻須

我問比佐氣牟止

佐夫之岐事乃味之

見行阿加良閑賜牟止

欺美明美意太比之美

多能母志美

罷止富良之奴礼娶

言牟須部母無

為牟須倍母不知尔

和備賜比

弥麻之大臣之家内子等乎母

波布理不賜、失不賜

弥麻之大臣乃罷道母

字之呂輕久

心母意太比尔念而

*平久幸久罷止富良須倍之止

美麻志大臣乃

(第四六詔)

〃

〃

(第四八詔)

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

(第五二詔)

加多自氣奈美 伊蘇志美思坐須

免賜比奈太每賜比氏

遍麻年久

念良麻久毛恥志賀多自氣奈志

安加良米佐須如事久

於与豆礼加毛

都々牟事無久

字志呂毛輕久

神奈我良所知食

曾毛曾毛百足之虫乃

滅人等麻禰久在

於夜乃多米爾止奈母

問賜比支多米賜倍久

遠知奈岐奴不覺シテ

加久太爾母

伊布加志美、意保々志美念牟加止奈母

(注 本文は金子武雄氏校訂朝日全書本による。宣長「歷朝詔

詞解」によつて序数を示したが、第六三は元興寺縁起中の

一篇、第六四は正倉院文書中の一篇。固有名の場合をのぞ

く。本文に、小字でかゝれてゐても、大字として書かれる

べき筈の個所も右にふくめ、*印で区別した。)

右は、大字にて書かれ、かつ仮名書きと看做すべきところ

のすべてを、宣命について抄出したのであるが、元来、宣命

書きの表記体は、

(第五二詔)

(第五三詔)

(第五四詔)

(")

(第五八詔)

(")

(")

(")

(第五九詔)

(")

(")

(第六一詔)

(第六二詔)

(第六三詔)

(第六四詔)

(")

A 漢字……a 概念語

P 大字

Q 小字

B 仮名……b 關係辭

とするとき、

(一) A—a—P

(二) B—b—Q

の二つの組合せが、量的には多いので、この二項をもつて宣命書きの通則、傾向と見得るのであらうが、右の側のやうに概念語の、大字における仮名の用法 すなはち

B—a—P

があり、また極めて小数ながら

B—b—P

B—a—Q

もある。従来、統紀宣命の表記法については、大字小字の区別は、いふまでもなく論者の著眼して忘れないところであり、その面での結論は、前出「国語学史」(四六頁)によれば

「大字細字の区別ある記載法は(…本稿筆者補ふ)」

形容詞にありては比較的はその区別整へるに、他の用言に到り

ては、その語幹と活用とを大字細字に書き分くる法必ずしも一

定せずして区々なりしものなるを見る。然らば、当時この書き

別け方に規律全く無かりしものと見るに、形容詞にて上にい

へるが如く条理略整へり。しか、形容詞には整然たるものが、

他の用言には不整頓に見ゆるは如何。これには、先づ、敬語を

以て補助語と見るといふ一の事情もあるべきが、他の大なる原

因は、これらの用言はいづれも複語尾を伴ふ性質を有するものにしてその複語尾は漢語の本義の文字「所」「令」「欲」「不」

「不」^ズ「而」^テ「可」^{ベシ}などの字…筆者注）を用ゐざる限りはすべて細字にて書けるによりて、それが本幹たる用言の活用は、或は大宇にてかかれ、或は細字にてかかれ、彼是と動揺せりしものと見られたり。

また、同書（四八頁）には、

厳密にいへば、もとより国語の性質を十分に認識せりといはるべきにあらねど、大体に於いて、主要語と補助語との区別を知り、又觀念をあらはす部分と、言語繰縦の方式の部分との区別を認め、又用言と語幹との区別の存することを略識りたりしものといふべきなり。

とあつて、大宇と小宇（細字）との書き分けについては、全く言ひ尽されてゐるのであり、大宇における仮名的用法の現象の存在することについても、勿論言及してゐる。けれども、この現象を、時としておこる、偶発的、無意味の事とみるわけには行かぬのではなからうか。

一体、万葉仮名が、推古朝金石遺文などにおいては、固有名詞（人名地名）の表記に、まづもつて使用されたといふことは定説である。また古事記の本文や自注や、日本書紀訓注などに徴してみれば、国語の固有語の語形温存のための表記方式といふ意図を含めて採用されたことも、疑ふべからざるところとされる。宣命書きの一般的傾向に外れるものと見るべき、前掲の一九〇余行にわたる項は、偶発・無意味ないし、物のまぎれと断じてよいものであらうか。

統紀宣命は、その統紀への登録に際しては、同一人の手を

同様に經たと見ることも許されようが、その本来の草案は、文武朝から桓武朝に及ぶ九十余年に散見するものであつて、そこに一貫した方式——ことに嚴格に首尾一貫した方式を期待すること自体に多少の不自然さがあるわけで、偶発・無意味といふ直覺的な判断も介在して不当とはいへないであらう。けれども、今その仮名書きの、語を、整理してみると、次のやうになるのである。（数字は詔の序数、大宇小宇をかたかなでうつし區別した。）

アカラハ	51	イソシミ	52
アカラメサス	58	イトホシミナモ	27
アケ	28	イナト	36
アナナヒ	3	イナビ	25
アマタタヒ	30	イハバ	7
アラネトモ	28	イハルヘキ	27
アラハシ	41	イハレヌ	13
アレ坐ム	1	イフカシミ	64
アレヤ	13	イマシ	29
イカニカ	25	イマス	51
イサナヒ	13	イマシケリ	41
イサナヒ	15	イマサヘトナモ	38
イサナヒ	19	イマセハナモ	41
イサナハレス	32	イヤ嗣ニ	44
イソシミ	13	イヤ益ス	25
	33		14
	19		41
	31		51
	32		51

ウシロ輕ク
ウシロモ輕ク
ウチハヤキ
ウツシクモ
(相)ウツナヒ
(相)ウツナヒ
ウヘナミ
ウムカシキ
ウムカシミ
ウムカシニ
ウヤウヤシク
ウレシキ
オタヒニ
オタヒシミ
オノガ
オノモ
オホキ
オホセ給フ
オホホシミ
オホマシマス
大マシマセハ
オモシキ
オモブケ

31
38
45
51
6 25 41 45 64 45 7 33 33 3 51 51 41 27 26 13 7 33 13 23 48 4 6 6 32 58 51

オモブケ
オモホサク
オヤ
オヨツレ
カク
カク
カクシマニ
カソヒ
カタ
カタシケンナミ
カタシケンナシ
カタラヒ
カニカクニ
カヘスカヘス
神ナガラ
キタナク
キタメ
キラヒ
キラヒ
クスシク
クナタブレ(マドヒ)

27
27
27
27
27
32
34
41
25
6
6
7
7
13
19
19
51
58
61
51
13

19 41 43 45 62 43 59 16 31 36 54 52 39 19 13 64 25 64 58 61 51 13

クナタブレ(ラニ)
クル
コキダシキ
ココタク
ココチテ
コノ
コロ
サキハヘ
サケムト
サタカニ
サブシキ
サラニ
シカ
シノヒコト
シリヘノ
ススムコト
スベ
スマヒ
セ

51
51
31
7
40
27
33
51
5
51
13
29
6
45
18
7
27
19

19 27 51 31 7 40 27 33 51 5 51 13 29 6 45 18 7 27 19

(ニ)セムト
ソモソモ
ソリテ
タツカナキ
タニハ
タノモシミ
タハコト
タビ重テ
タマヒニ
タメ
タヤスク
タリマヒテ
ツカハスコト
ツカヘト
ツカラシク
ツキ
ツツム
ツヨク
トトノヒ

7
29 41 45 58 25 45 45 28 2 28 61 38 25 51 51 13 13 28 59 19

イサナヒテ（伊射奈比底）（一七ノ四〇一一）（大伴家持の歌）
イサナヒタマヒ（伊射奈比多麻比）

（一八ノ四〇九四）（大伴家持の歌）

の二例だけである。「相」ウツナヒ」も

天地乃神安比宇豆奈比（一八ノ四〇九四）（大伴家持の歌）

と局限のある語である。この、卷一八の例は、右にのべたやうに、統紀宣命と深い関係があるのであるから、注意を要する。「相」ウツナヒ」は、祝詞では

皇神等相宇豆乃比奉互（大嘗祭）

千秋五百秋乃相嘗仁相宇豆乃比奉利（中臣壽詞）

があるが、同一の語根と思はれる「ウツ」は、野村八良氏「日本散文学史」では特殊の古語であつたといふ見解を示されてゐる。「ウツ」は

宇豆

宇都

両様に書かれて、やはり大字である。「宇豆」は「宇豆能（大幣帛）」の例が非常に多く見え、「宇都」は大殿祭の「皇我宇都御子」のごときである。万葉集に

天皇朕宇頭乃御手以（六ノ九七三）

が見えるが、右で見る限りでは、「ウヅノ」「ウツナヒ」「ウヅノヒ」が、すべて仮名書きで一貫してゐるとみてよいであらう。はるかの後代、熱田本平家にも「宇津広前」の字面がある。「イサナフ」の語根「イサ」については同様のことを求めることはできないが、ここに、大字の仮名書きに何らか

の秩序（たとへば、右野村氏のいはゆる特殊の古語といふやうな）を見出さうと努力してゐることが無意味でないことが示されてゐるはしないか。

次に「オタヒニ」は、辞書によるとこの語の用例は統紀宣命のほかには、陰陽寮式の饗祭の祭文の箇所を引いてゐる。

天地能諸郷神等波平久於太比爾伊麻佐布倍志登申。

とあるのは、同じ趣きのものと考へられる。万葉集には見えない。類聚名蔵抄法の印、「穩」字に「オタヒカナリ」と見えるが、観智院本なのでたしかとはいへぬ。

「キラヒ」の語は六例をかぞへるが、これは、日本書記神代上に

有_二手端吉棄物、足端凶棄物_一

の訓注

手端吉棄此云多那須衛能余之岐羅毗_一

に、同じ語を見る。思ふに、訓注は、「棄」字での、「キラヒ」の表記には特殊であり、不十分を覚えたためであらうから、「棄」字の訓としての定着がなかつたと見ることができ。類聚名義抄索引によれば、名義抄にもキラフの訓を「棄」には見ない。また色葉字数抄にも見えない。逆にいへば「キラヒ」の語を表記する意字に適切なものをその時は有しなかつたものと見られまいかと考へるわけである。

右の宣命書きの大字仮名の由来する所について、前にものべたが本稿がここに断案を準備してゐるわけではない。しかし、右に数へたすべてが、表記者の気まぐれでといふもので

はあるまいことを、暗示しようとしてするのである。祝詞や宣命では、表記法自体その伝承をつづけて、古形を模するものが通例であつたことが考へられる。今ここで何も判然としたことを述べるのが出来ないのは遺憾であるが、宣命書きといふ方式が宣命といふテクストによつて、また祝詞の表記として、平安時代から後にも意識的に伝承されたものかどうかの問題を考へることは、決して無駄な詮議ではあるまい。右にのべたことは、しかし、問題を確認するまでに止まる。けれども、くりかへしていふが宣命書きの源流と見られる、続紀宣命に、右のやうな現象をふくむことは、一見異様なことであり、宣命書き自体の内部的矛盾とみられるわけである。しかし一面からすると、あたかも、次のやうな現象とならべて考へてみるべきものではなからうか。

三、対蹠的な場合

——かな文における漢字の混入の場合——

万葉集の諸巻のうち、一字一音式に徹底して仮名表記が行はれたと、普通あつさりと考へてゐる巻々の表記の方式を見るに、そこに、なほ、漢字の表意的用法が混入してゐて、文字通りの、徹底した一字一音方式が履行せられてゐないといふ現象がそれである。また、下つての日本紀竟宴和歌においても同様のことが指摘せられる。仮に慎重な、そして作爲的といふほどの配慮が用意されてあつても、筆のあやまりや、筆の走りといふものは、それを全く避けることができないの

ではないか。

万葉集の一字一音の方式が一の巻全巻にわたつて採用されてゐるのは、巻五、巻一四、巻一五、巻一七、巻一八、巻一九、巻二〇であるが、今それらの諸巻において、表意的用法の混在を指摘することは、さしたる難事ではない。

大王	朝廷	子	年月	石木	には鳥	(五ノ七九四)
父母	妻子	大王	日月			(五ノ八〇〇)
銀金	玉					(五ノ八〇三)
世間	年月	(袖)				(五ノ八〇四)
樹						(五ノ八一)
世人						(五ノ八一三)
万世						(五ノ八三〇)
国	遠路	長手				(五ノ八八四)
朝露	我身	国目				(五ノ八八五)
宮	国	百重山	越	京師	身	玉鉾
母	世間					道
道	長手					父
家						家
日						(五ノ八八七)
一世	二遍	(相別)				(五ノ八八九)
風	雜雨	雪寒	堅塩	取	糟湯酒	鼻
人	麻被	引布衣	寒夜	貧人	父母	妻子等
泣	此時	汝代	天地	狭	日月	照
綿	肩	打懸	内	直土	藁	解敷
					枕	足
					方	圀居

憂吟 飯炊事 ぬえ鳥 居 短物 端 如 楚

五十戸良 来立 呼 世間 道 (五ノ八九二)

世間 飛立 鳥 (五ノ八九三)

神代 云伝 皇神 国 言靈 繼 今世 人 目前

見在 知在 満 高光 日 御朝廷 神ながら 愛 盛

天下 奏 家子 撰 勅旨 載持 唐 遠境 奥

神づまり 諸 大御神等 船舳 道引 天地 大國靈

見渡 事 了 還 日 又 更 御手 打掛 墨繩 岫 (五ノ八九四)

泊 連 帰 (五ノ八九五)

松原 掃 立待 速 帰 (五ノ八九六)

み船 泊 紐解 (五ノ八九七)

靈剋 内 限 平 安 事 無 世間 鹹塩 灌 益益

重 馬 荷 表 荷 打 老 我 身上 病 昼 歎 夜

息 年 長 渡 月 累 憂吟 五月蠅 兒等 死 知 (五ノ八九八)

見 心 思 (五ノ八九九)

心 雲 隱 鳴 往 鳥 (五ノ九〇〇)

苦 出 思 (五ノ九〇一)

富人 家 子 等 身 純 綿 (五ノ九〇二)

龜 妙 布 衣 難 歎 (五ノ九〇三)

水 沫 微 命 桡 繩 千 尋 慕 (五ノ九〇四)

倭 文 手 纏 数 在 身 千 年 (五ノ九〇五)

世人 貴 慕 七 種 宝 我 何 為 中 産 白 玉 吾 子

明星 開 朝 敷 立 居 戲 夕 星 手 父 母 表

三 枝 愛 何 時 大 船 横 風 覆 来 鏡 天 神 地 祇

額 拜 神 須 叟 漸 々 朝 朝 靈 剋 足 伏 仰 世 間

道 (五ノ九〇四)

道 行 使 (五ノ九〇五)

名 (二四ノ三三六二)

木 (二四ノ三三六三)

実 (二四ノ三三六四)

湫 (二四ノ三三六六)

湯 (二四ノ三三八二)

葉 (二四ノ三三八三)

目 (二四ノ三四〇一)

(中 まな) (二四ノ三四二七)

兒 (二四ノ三四三二)

木 (二四ノ三四三三)

木 (二四ノ三四三三)

野 (二四ノ三四三九)

井 (二四ノ三四四二)

手 兒 (二四ノ三四五二)

野 (二四ノ三四五七)

女 (二四ノ三四五九)

手 (二四ノ三四六一)

真 日 (二四ノ三四六二)

兒 (二四ノ三四六六)

緒 ろ (二四ノ三四六七)

真 木 (二四ノ三四六七)

千 児ろ (一四ノ三四七〇)
 児な (一四ノ三四七三)
 あづま道 (一四ノ三四七六)
 手児 (一四ノ三四七七)
 哭手児 (一四ノ三四八五)
 宿 (一四ノ三四八七)
 目 (一四ノ三四九〇)
 田 (一四ノ三四九二)
 児宿汝 (一四ノ三四九四)
 根児 (一四ノ三五〇〇)
 葉夜 (一四ノ三五〇四)
 瀬 (一四ノ三五〇五)
 根 (一四ノ三五〇八)
 宿 (一四ノ三五〇九)
 児 (一四ノ三五一一三)
 見 (一四ノ三五一一五)
 見 (一四ノ三五一六)
 来児見 (一四ノ三五一九)
 野見 (一四ノ三五二〇)
 児宿 (一四ノ三五二二)
 田 (一四ノ三五二三)
 水野児宿 (一四ノ三五二五)
 水 (一四ノ三五二八)

(一四ノ三四七〇)
 (一四ノ三四七三)
 (一四ノ三四七六)
 (一四ノ三四七七)
 (一四ノ三四八五)
 (一四ノ三四八七)
 (一四ノ三四九〇)
 (一四ノ三四九二)
 (一四ノ三四九四)
 (一四ノ三五〇〇)
 (一四ノ三五〇四)
 (一四ノ三五〇五)
 (一四ノ三五〇八)
 (一四ノ三五〇九)
 (一四ノ三五一一三)
 (一四ノ三五一一五)
 (一四ノ三五一六)
 (一四ノ三五一九)
 (一四ノ三五二〇)
 (一四ノ三五二二)
 (一四ノ三五二三)
 (一四ノ三五二五)
 (一四ノ三五二八)

野野 (一四ノ三五二九)
 野 (一四ノ三五三二)
 児 (一四ノ三五三四)
 児 (一四ノ三五二七)
 手児 (一四ノ三五四〇)
 江沼 (一四ノ三五四七)
 木つ (一四ノ三五四八)
 宿 (一四ノ三五五〇)
 湍 (一四ノ三五五一)
 水 (一四ノ三五五三)
 水 (一四ノ三五五四)
 宿莫児 (一四ノ三五五五)
 宿 (一四ノ三五五六)
 田 (一四ノ三五六一)
 宿 (一四ノ三五六二)
 児ろ (一四ノ三五六四)
 宿野 (一四ノ三五六五)
 児 (一四ノ三五六九)
 葉 (一四ノ三五七〇)
 鳴 (一四ノ三五七〇)
 宿 (一四ノ三五七七)
 浦江渚鳥 (一四ノ三五七七)
 大船 (一五ノ三五七八)
 君海辺 (一五ノ三五七九)
 (一五ノ三五八〇)

(一四ノ三五二九)
 (一四ノ三五三二)
 (一四ノ三五三四)
 (一四ノ三五二七)
 (一四ノ三五四〇)
 (一四ノ三五四七)
 (一四ノ三五四八)
 (一四ノ三五五〇)
 (一四ノ三五五一)
 (一四ノ三五五三)
 (一四ノ三五五四)
 (一四ノ三五五五)
 (一四ノ三五五六)
 (一四ノ三五六一)
 (一四ノ三五六二)
 (一四ノ三五六四)
 (一四ノ三五六五)
 (一四ノ三五六九)
 (一四ノ三五七〇)
 (一四ノ三五七〇)
 (一四ノ三五七七)
 (一四ノ三五七七)
 (一五ノ三五七八)
 (一五ノ三五七九)
 (一五ノ三五八〇)

秋 大船 君
 真幸
 秋風
 (新羅)
 異情
 山
 山
 妹時
 海原 夜風 妹
 大伴 出
 妹
 女
 月 神島 船出
 木 時
 木
 種 蒔 忌忌き
 妹
 日
 女 野島
 藤江
 道 門 見
 船 見
 月人

(二五ノ三五八一)
 (二五ノ三五八二)
 (二五ノ三五八三)
 (二五ノ三五八六)
 (二五ノ三五八七)
 (二五ノ三五八八)
 (二五ノ三五八九)
 (二五ノ三五九〇)
 (二五ノ三五九一)
 (二五ノ三五九二)
 (二五ノ三五九三)
 (二五ノ三五九四)
 (二五ノ三五九七)
 (二五ノ三五九九)
 (二五ノ三六〇〇)
 (二五ノ三六〇一)
 (二五ノ三六〇三)
 (二五ノ三六〇四)
 (二五ノ三六〇五)
 (二五ノ三六〇六)
 (二五ノ三六〇七)
 (二五ノ三六〇八)
 (二五ノ三六〇九)
 (二五ノ三六一一)

海原
 白玉
 妹 風早
 鳴蟬 京師
 山河 秋
 小松原
 月よみ
 山 月
 尾 宿
 手 真かち 女 小船 乗 船人 子 見
 見
 真かち
 大船
 筑紫道 見
 見
 名 門
 船
 女
 風
 月 見
 月 見
 一日
 江

(二五ノ三六一三)
 (二五ノ三六一四)
 (二五ノ三六一五)
 (二五ノ三六一七)
 (二五ノ三六一九)
 (二五ノ三六二一)
 (二五ノ三六二二)
 (二五ノ三六二三)
 (二五ノ三六二五)
 (二五ノ三六二七)
 (二五ノ三六二八)
 (二五ノ三六三〇)
 (二五ノ三六三二)
 (二五ノ三六三四)
 (二五ノ三六三五)
 (二五ノ三六三八)
 (二五ノ三六四〇)
 (二五ノ三六四一)
 (二五ノ三六四六)
 (二五ノ三六五〇)
 (二五ノ三六五一)
 (二五ノ三六五二)
 (二五ノ三六五三)

(二五)三六九八
 (二五)三六九九
 (二五)三七〇〇
 (二五)三七〇三
 (二五)三七〇四
 (二五)三七〇五
 (二五)三七一一
 (二五)三七一四
 (二五)三七一六
 (二五)三七二二
 (二五)三七二三
 (二五)三七二四
 (二五)三七二五
 (二五)三七二八
 (二五)三七三〇
 (二五)三七三一
 (二五)三七三四
 (二五)三七三六
 (二五)三七三八
 (二五)三七四二
 (二五)三七四三
 (二五)三七四六
 (二五)三七四七
 (二五)三七五二

日 過所子
 山川 一日見
 大宮人
 山川
 君
 君
 野 屋どれる 君
 宮人 君
 君
 御馬屋
 見
 女兒 松原 見度 女藻
 荒津の海 時 吾
 海夫 釣船 我船
 昨日 いさ魚 今日 見
 淡路島 船
 天伝 日 家
 家 命 浪 思
 大海 何時 兒等
 大船 歌

(一五ノ三七五三)
 (一五ノ三七五四)
 (一五ノ三七五五)
 (一五ノ三七五六)
 (一五ノ三七五八)
 (一五ノ三七六二)
 (一五ノ三七六四)
 (一五ノ三七六八)
 (一五ノ三七六九)
 (一五ノ三七七〇)
 (一五ノ三七七一)
 (一五ノ三七七二)
 (一五ノ三七七三)
 (一五ノ三七七六)
 (一五ノ三七七九)
 (一七ノ三八九〇)
 (一七ノ三八九一)
 (一七ノ三八九二)
 (一七ノ三八九三)
 (一七ノ三八九四)
 (一七ノ三八九五)
 (一七ノ三八九六)
 (一七ノ三八九七)
 (一七ノ三八九八)

海未通女 火 松原
 船乗 鏡 月夜 雲 起
 君 人
 花 如此 君 見
 春雨 花 常物
 花 盛
 遊内 庭 梅 柳
 御苑ふ 百木 落花 雪
 山背 春 花咲 秋 黄葉 泉河 瀬 橋 万代
 楯並 氷 大宮所
 常花 来鳴 日
 珠 宅 霍公鳥
 山辺 木際 日
 情 花 月 来鳴
 枝 花 珠 見
 今 来鳴 代 所念
 山谷 野 今 鳴
 橘 香 雨
 夜音 指 花
 橘 苑 鳴
 青丹 不 鳴
 鶉 鳴 花 橘 屋 ど
 衣服 そひ 獵 月

(一七ノ三八九九)
 (一七ノ三九〇〇)
 (一七ノ三九〇一)
 (一七ノ三九〇二)
 (一七ノ三九〇三)
 (一七ノ三九〇四)
 (一七ノ三九〇五)
 (一七ノ三九〇六)
 (一七ノ三九〇七)
 (一七ノ三九〇八)
 (一七ノ三九〇九)
 (一七ノ三九一〇)
 (一七ノ三九一一)
 (一七ノ三九一二)
 (一七ノ三九一三)
 (一七ノ三九一四)
 (一七ノ三九一五)
 (一七ノ三九一六)
 (一七ノ三九一七)
 (一七ノ三九一八)
 (一七ノ三九一九)
 (一七ノ三九二〇)
 (一七ノ三九二一)

しろ髪 大皇 貴くも	(一七ノ三九二二)	な弟 時 穂 出 秋 芽子花 屋戸を 暮庭 里	(一七ノ三九五七)
天下 ふる雪	(一七ノ三九二三)	往過 山 白雲	(一七ノ三九五八)
山 見えず をとつ日 昨日 今日	(一七ノ三九二四)	物 白雲	(一七ノ三九五九)
新年 豊のとし 雪	(一七ノ三九二五)	(物の)	(一七ノ三九六〇)
大宮 零 白雪 見れど	(一七ノ三九二六)	庭 雪	(一七ノ三九六一)
吾名 たつた山 絶	(一七ノ三九三二)	白浪 榜船 間なく	(一七ノ三九六二)
海辺 恋	(一七ノ三九三三)	大王 大夫 情 山坂 年月 代人 日(に)異(に)	(一七ノ三九六三)
目	(一七ノ三九三四)	大船 情 門 黒髪 児等 間使 情 (一七ノ三九六二)	(一七ノ三九六四)
草枕 月日	(一七ノ三九三七)	世間 春花 (物の)	(一七ノ三九六五)
鶯	(一七ノ三九四一)	山河 見ず	(一七ノ三九六六)
秋田 穂むき 見がてり	(一七ノ三九四三)	春花	
野辺	(一七ノ三九四四)	日異 思出 念出 間使 遣 縁 隠居而 念なげかひ	
妹 衣袖	(一七ノ三九四五)	春花 野 鶯音 我 春菜 赤裳 時盛 君が心 此夜	
秋風 来鳴	(一七ノ三九四六)	今日	
秋風 来鳴	(一七ノ三九四七)	ひと目 見てば	
月 歴ぬ 紐	(一七ノ三九四八)	鶯 聞らむ	
念意	(一七ノ三九五〇)	やま野 春野	
日晚 野辺	(一七ノ三九五二)	妹 吾 相見 情 大王 別来 日 荒璞 春花	
藤花 春	(一七ノ三九五三)	相見ねば 宿夜 近在ば 妹 路 関 霍公鳥 来鳴	
鴈 秋風	(一七ノ三九五四)	うの花 山 淡海路 青丹 吾家 恋 吾 妹 早	
馬並て	(一七ノ三九五五)	見む	
月	(一七ノ三九五五)	見ねば	
大王 出而 青丹 泉河 馬駐(め) 時に 好去て		見れど	
平く 待と 道 山河 (物のを)見まく 念間に 使		春花 月日	

山葉 出立 見がほし

(一七ノ三九八五)

鳴鳥

(一七ノ三九八七)

手に 見つゝ

(一七ノ三九九〇)

見つれども 見れば 見のさやけさか

見ること

(一七ノ三九九一)

見つゝ

(一七ノ三九九二)

野にも

(一七ノ三九九三)

見ぬ 日

(一七ノ三九九五)

花橋

(一七ノ三九九八)

日 見て

(一七ノ三九九九)

名 瀬 見つゝ 見ぬ 名

(一七ノ四〇〇〇)

見れども

(一七ノ四〇〇一)

瀬

(一七ノ四〇〇二)

いく代 経にけむ 見れども

(一七ノ四〇〇三)

見る

(一七ノ四〇〇五)

手 見つゝ

(一七ノ四〇〇六)

手

(一七ノ四〇〇七)

見つゝ 見わたせば あひ見しめ

(一七ノ四〇〇八)

大王 美雪 越名 山高み 河野

鵜養 瀬 露霜

野 矢形尾 大黒 鈴 朝霧 暮霧

手放 情 吾 日

名 三島野 見つゝ 二上山 心 火

神社 鏡 江

旧江 をとつ日

(一七ノ四〇一一)

矢形尾 日

(一七ノ四〇一二)

其日

(一七ノ四〇一四)

情

(一七ノ四〇一五)

野

(一七ノ四〇一六)

東風

(一七ノ四〇一七)

江

(一七ノ四〇一八)

日 (信濃)

(一七ノ四〇一九)

葦附 湍

(一七ノ四〇二〇)

瀬 (馬) (河は)

(一七ノ四〇二二)

瀬

(一七ノ四〇二三)

瀬

(一七ノ四〇二四)

海 船 梶

(一七ノ四〇二五)

船木 島山 今日

(一七ノ四〇二六)

香島 間 京師

(一七ノ四〇二七)

瀬

(一七ノ四〇二八)

見て

(一八ノ四〇三二)

日

(一八ノ四〇三五)

目 見ぬ 見ずは

(一八ノ四〇三九)

見ては

(一八ノ四〇四〇)

たるひ女 見れども

(一八ノ四〇四六)

日

(一八ノ四〇四七)

たるひ女

(一八ノ四〇四八)

見れど

(一八ノ四〇四九)

日

(一八ノ四〇五五)

ほり江 大皇

(二八ノ四〇五六)

ほり江

(二八ノ四〇五七)

ほり江 水を瀬

(二八ノ四〇六一)

瀬

(二八ノ四〇六二)

(物の) 大皇 見ること

(二八ノ四〇六三)

大皇

(二八ノ四〇六四)

いり江 吾家

(二八ノ四〇六五)

うの花

(二八ノ四〇六六)

見せむ

(二八ノ四〇七〇)

(楊なぎ)

(二八ノ四〇七一)

桜花 今 盛 入 雖 云 我 不在

(二八ノ四〇七四)

ひと目 見に

(二八ノ四〇七七)

みしま野

(二八ノ四〇七九)

名のり

(二八ノ四〇八四)

あぶら火 見ゆる

(二八ノ四〇八六)

ともし火 見ゆる

(二八ノ四〇八七)

高御座 日継 山 百鳥 来居て 春

うの花 月 鳴

珠

(二八ノ四〇八九)

うの花 名のり

(二八ノ四〇九二)

橘

(二八ノ四〇九二)

葦原 国 神 御代 天の日嗣 御代御代 四方 国

山河 御調 宝 吾大王 善事 鶏鳴 東国 小田 山

金有 御心 天地 神 皇御祖 御靈 遠代 朕 御世

御食国 (物の) 八十伴雄 老人 女童兒 願 心 撫

賜大伴 遠つ神祖 其名 大来目主 官 海行 屍 山

行草 屍 大皇 死 かへり見 大夫 彼名 子 大伴

佐伯氏 人祖 立 辞立 人子 祖名 不絶 大君

(物の) 梓弓 手 劔大刀 大王 み門 且 大皇

御言 聞 貴 (二八ノ四〇九四)

聞 (二八ノ四〇九五)

大伴 (二八ノ四〇九六)

御代 金花 (二八ノ四〇九七)

日嗣 天下 名 負 大王 此河 此山

(二八ノ四〇九八)

(物の) 氏人 見む (二八ノ四一〇〇)

ぬば玉 夜床 月日 心 五月 (二八ノ四一〇一)

白玉 (二八ノ四一〇二)

手 (二八ノ四一〇六)

神代 父母 見は 妻子 見は (物の) 世人 ちさの花

天地 春花 何時 心 南吹 雪消 益而 射水河 流

水沫 其兒 雙坐 (二八ノ四一〇六)

見る目 兒 (二八ノ四一〇八)

兒 (二八ノ四一二〇)

皇神祖 大御世 田道間守 常世 時 菓子 国 孫枝

五月 見れども 秋づけば 雨零 成る 其実 ひた照

いや見がほし 冬霜 其葉 常磐 神 御代 此橘

木実 名附 (二八ノ四一二一)

橘 花 実 時じく (二八ノ四一二二)

官	くだり来	五年	手枕	まろ宿	情	屋戸	夏
開花	さゆり花	一日					
花							
さゆり花	相	今日					
年内	野ゆき	月日	五月	射水河			
夏野	花咲	今日	鏡	見む			
秋	今日	見れば					
見る	年月	経れば					
見まく	君	見つる					
朝参							
四方	万調	日	見れば	みどり児	見ゆる		
御代	代人	往更	年	見つゝ			
(う梅)							
山行	山人						
山情	山人						
秋風							
野							
霜上	年緒						
年月							
春初	見む						
いなみ野							
花	見まく						
秋風							
(二八ノ四二一三)							
(二八ノ四二一四)							
(二八ノ四二一五)							
雪消溢	逝水	君					
(二八ノ四二一六)							
(二八ノ四二一七)							
(二八ノ四二一八)							
(二八ノ四二二〇)							
(二八ノ四二二一)							
(二八ノ四二二二)							
(二八ノ四二二五)							
(二八ノ四二九三)							
(二〇ノ四三九五)							
(二〇ノ四三九七)							
(二〇ノ四二九八)							
(二〇ノ四二九九)							
(二〇ノ四三〇〇)							
(二〇ノ四三〇一)							
(二〇ノ四三〇四)							
(二〇ノ四三〇六)							
秋花	見まく						
見む	年緒						
秋風							
見む							
秋風	月						
秋草	見る	月					
八千種	見つゝ						
宮人							
秋野							
野							
秋野							
ますら男	あき野						
父母							
昼							
日							
天皇	朝庭	しらぬ日	筑紫国	間食	四方国		
かへり見	軍卒	目	若草	月日	み津	大船	間
大王	ますら男	事	恋				
ますら男							
海原	児						
今替							
ほり江	手ぶね	恋					
父母							
(二〇ノ四三〇七)							
(二〇ノ四三〇八)							
(二〇ノ四三〇九)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							
(二〇ノ四三一〇)							

白玉

(二〇ノ四三四〇)

道 長道

(二〇ノ四三四一)

天皇 難波 大王 春初 見のともしく 見のさやけくも

難波宮 四方 船 ほり江 海原 見れば 見れば

神代 (二〇ノ四三六〇)

桜花 難波の海 宮 (二〇ノ四三六一)

海原 見つゝ (二〇ノ四三六二)

なにはの津 (二〇ノ四三六五)

見つゝ (二〇ノ四三九五)

ほり江 (二〇ノ四三九六)

見わたせば (二〇ノ四三九七)

大王 大夫 情 門出 若草 平く 好去 早還来

言語 群鳥 国 山 (難波) 船 春霞 悲鳴

(二〇ノ四三九八)

霜 (二〇ノ四三九九)

大王 島守 吾子 今日 若草 春鳥 天皇 出立

かへり見 海原 船 (二〇ノ四四〇八)

根 (二〇ノ四四五四)

芹子 (二〇ノ四四五五)

すみの江 根 見る (二〇ノ四四五七)

(河は) (二〇ノ四四五八)

蘆刈 ほり江 (二〇ノ四四五九)

ほり江 船 (二〇ノ四四六〇)

ほり江 梶の音 (二〇ノ四四六一)

ほり江

(二〇ノ四四六二)

御代 山河 神 宮 日継 名 大伴 (二〇ノ四四六五)

身 見つゝ (二〇ノ四四六六)

(わたる)日 (二〇ノ四四六八)

(さほ河は) (二〇ノ四四六九)

時 見 (二〇ノ四四七八)

時花 (二〇ノ四四八三)

天地 日月 極 (二〇ノ四四八五)

子ども 天地 (二〇ノ四四八七)

み雪 鶯 春べ (二〇ノ四四八八)

ぬば玉 (二〇ノ四四八九)

冬 霞 (二〇ノ四四九二)

始春 手 (二〇ノ四四九三)

水鳥 羽 青馬 (二〇ノ四四九四)

打なびく うゑ木 樹間 (二〇ノ四四九五)

(う梅) (二〇ノ四四九六)

(う梅) (二〇ノ四四九七)

(う梅) 香 (二〇ノ四五〇〇)

(う梅) (二〇ノ四五〇二)

日 (二〇ノ四五〇四)

野辺 (二〇ノ四五〇九)

秋風 花 (二〇ノ四五一五)

新年 始 (二〇ノ四五六一)

以上に煩をいとはず列挙したところから、読者は一字一音式に徹底した仮名表記といふものが、万葉集においても、そしてその特別な巻々に於ても必ずしも多くはないことが知られるであらう。即ち右の巻五、巻十四、巻十五、巻十七、巻十八、巻二十の諸巻中、以上に挙示するところのない歌番号を拾つて見るだけで十分である。巻五は七九四から九〇六まで、巻十四は三三八から三五七まで、巻十五は三五七八から三七八五まで、巻十七は三八九〇から四〇三一まで、巻十八は四〇三二から四一三八まで、巻二十は四二九三から四五一六まで、長短をとりまぜて、総歌数九二四、そのうち以上に示すことなき、一字一音徹底表記の体の歌は、四八二となる。過半数は、たしかに徹底した一字一音式仮名表記であるが、右に列挙した四四二首に上る、四七%強のものが、それらと共に存する他の諸歌と同列に、等質のごとき表記体を一見呈し乍ら、実はちがつてゐるのである。そして、今、それらが、どのやうな語の上に、どのやうな字で現はれてゐるかを、とりまとめて展望して置くのは、決して無駄ではあるまいと思ふ。ここに、直ちに用語と用字との内的関連が洞察される、といふほど単純な事態ではないが、このやうに、混入して来る漢字の影響は、遂に、仮名が、字体の上で、漢字から脱化する時代に至つても、克服しえない、重い荷であつたらうことを、予見させるのである。また、仮名の世界になつてからも、なほ漢字の表意的用法を混在せしめざるを得なかつた時の、一つの傾向——どんな語を漢字表記にゆだね

るかといふことを見るのに、役立ちはしないかと思ふのである。

長歌において、例外なしに、表意的用法が混入してゐるといふ事や、東歌や防人歌には、それが少く、有る場合でも、大体、一音節語（一音節語幹）の場合に限定されるといふ事などは注目すべきであらう。前にもふれたが、一音節の訓仮名は、表音が表意がいづれが主であるかの判定にくるしむものはないではないが、ここでは、正字法といふ点からみて、いはゆる仮借とみられないなら、すべて寛大に取扱ふ趣旨を立てて一貫したのである。なほまた、二字つゞけて表意的用法がある場合はなるべく、二字つゞけて、二字以上の場合も可能なかぎり一連のものとして取扱つた。これは、用字の慣例とでもいふべき意識を探索する手懸りとして、不必要ではないと考へたからである。

また「鳥梅」「字梅」のやうな例、「河波」「物能」のやうな例、「楊奈疑」のやうな例——これらは後世の捨仮名を伴ふものとはゞ同一性格のものとも考へられるもの故、切捨てないで登録した。地名人名に属するものは借音表記が多いが、今、後尾に（ ）にかこんでのせた。

たゞし、左の表は、すべて、用字を拾ふのを主眼として、先づ例を採取し、その訓については、十分な研討を加へる余裕を有しないまゝ、便宜の訓で整理したのであるから、多少の誤りなきを保しがたい。*印をつけたのは、「過所」「朝参」が漢語で字音よみの語あるからの故である。

(ア) 朕 吾

明星 赤裳 秋 秋風 秋草 秋田 秋野 秋夜 開
朝 朝鵲 朝露 朝朝 麻被 足 葦刈 葦附 葦原
朝 明日 遊 梓弓 東国 (あつま道) 相見 相別
天伝 天神 天地 天下 天の日嗣 海夫 海未通女
雨 雨零 東風 新年 荒璞 龜妙 有 在 不在
青馬 青丹 (淡海 淡路 荒津)

(イ) 息 軍卒 いさ魚 戴持 何時 五年 (伊豆)手舟

泉河 出 出立 命 石木 飯炊 云伝 (雖...)云 宅
家 家子 今 今替 今世 妹 微命 (射水河)

(ウ) 鶺鴒 鶺鴒 歌 内 打 打掛 打懸 氏人 愛し 鶺

海 海原 海辺 海行 表 表荷 梅(う梅) 馬荷
産れ 浦 憂吟

(エ) 撰

(オ) 奥 音 大海 大王 大君 大皇 大国靈 大黒

大伴 大船 大御神等 大御世 大官人 大官所 勅旨
負 覆来 重 念 念意 念間 所念 思 思出 祖名
老 老人 (大来目主)

(カ) 香 鏡 限 如此 困居 累 数霞 糟湯酒 風

風 早 肩 方 難 堅塩 梶門 門出 悲 河 屍 還
還来 帰 神 神社 神代 髪 鹹塩 鴈 (獵・鵲)

(神島 香島)

(キ) 木 樹 来立 来鳴 来居 聞 聞食 服そひ 獵 衣
絶綿 昨日 極 君

(ク) 金 草 草枕 (くだり来) 国 地祇 雲 雲隠

黒髪 苦 *過所

(ケ) 異(ケニ) 異情 今日

(コ) 此河 此橘 此山 此夜 木実 木際 樹間 子
子等 兒 兒等 来 金 榜船 心 情 越 事 如
言 靈 言語 辞立 菓子 恋 乞 小船 小松原 隠居
越

(サ) 盛 岫 三枝 開花 桜花 指 五月 五月蟬

五十戸 良 里 寒 更 (佐伯氏)

(シ) 敷 倭文手纏 死 島守 島山 須臾 霜 霜上 楚

白雲 白玉 白浪 白雪 知 知在 銀 (信濃 新羅)

(ス) 鈴 渚鳥 墨繩 皇神 天皇 皇御祖 皇神祖

(セ) 狹 為 瀬 湍 関 芹子

(ソ) 灌 袖 苑 其兒 其名 其日 其葉 其実 彼名

(タ) 田 高み 高光 高御座 宝 榜繩 手放 手枕 立

立待 起 楯 橘 谷 種 平 戲 貴 玉 玉銚 珠
靈 剋 絶 不絶 (田道間守)

(チ) 近在 千 千年 千尋 父 父母 落花

(ツ) 官 使 遣 月 月日 月人 月夜 (月よみ) 継

作 常 露霜 釣船 劔大刀 (筑紫 対馬)

(テ) 手 手兒 手舟 照 (ひた照) *朝参

(ト) 時 時盛 時花 解散 常磐 常花 常世 年 年月

年内 年緒 駐 飛立 遠 遠境 遠代 遠つ神祖
富人 等 豊 鳥 鷄鳴 取

(ナ) 汝 (な弟) 莫名 名附 (名のり) 中長 長道

長手 九月 流鳴 不鳴 鳴蟬 鳴鳥 鳴往 歎無
成夏 夏野 撫撫 撫賜 七種 何為 浪並 雙坐

(難波 難波宮)

(ニ) 庭 (にほ鳥)

(ヌ) 沼 (ぬえ鳥) 額拜 布衣 宿夜 (野鳥)

(ネ) 根宿 願慕

(ノ) 野野 辺耳 乘

(ハ) 羽葉 芽子花 端橋 始泊 始春花 花咲

花橘 鼻母 溢早 速掃 春春霞 春雨 春鳥

春菜 春野 春初

(ヒ) 日 日晚 日月 日繼 火孫枝 直土 一日

一日一夜 一世 人 人祖 人子 引紐 紐解 屋

(フ) 伏仰 二遍 藤花 船 船木 船出 船人 船舳

船乘 零 旧江 経れば 冬 (二上 藤江)

(ヘ) 経歴

(ホ) 穂 霍公鳥

(マ) 間 間使 真(かち) 真木 真幸 真日 奏 蒔 枕

好去て 雜 益て 益益 大夫 又 且 待 貧人

松浦 松原 (まろ宿)

(ミ) 実 身 身上 見 見在 見度 見渡 朝廷 御朝廷

御心 御言 御苑生 御靈 御手 御調 御船 御馬屋

御代 御世 (み雪) 水 水鳥 水沫 短物 道 道引

道行 路 満 皆 南吹 宮 宮人 京師 (三島野)

み津)

(ム) 群鳥

(メ) 目 目前 女 女童児 妻子 愛

(モ) 藻 物 黄葉 百木 百鳥 百重山 唐 諸

(ヤ) 八十伴雄 八千種 矢形尾 漸々 安 屋戸 (屋ど・

屋どる) 柳 (楊なぎ) 病 山 山川 山河 山坂

山下 山背 山辺 山人 山道 山行

(ユ) 湯 雪 雪消 逝水 行過 往更 夕星 暮鴛 暮庭

忌忌し

(エ) 江 (ほり江)

(ヨ) 代 代人 世人 世間 夜 夜音 夜床 善事 縁

横風 呼 四方 万調 万代 万世

(ワ) 我 我身 吾 吾大王 吾名 吾家 吾子 若草

別来 綿 藻

(ヰ) 井

(エ) 画

(ウ) 尾 緒ろ (ますら) 男 御食国 小田 了 居

次に、平安朝に入つての例として、日本紀竟宴和歌の場合を参考にしたと思ふ。これは平安朝に入つての、一字一音式の万葉仮名の実用例として、やゝまとまつた資料であるからである。

竟宴和歌は、漢字表記を先にし、次に平仮名の表記を従へる、二様の表記体を、一首の歌に必ず行つてゐるので、(つ

まり万葉集の場合の、「訓を別提せる本」の形である）もしそれが本来の体裁ならばその表記の意識は、万葉集とおのづから異なるものが存するものと考へなければならぬが、今ここでは、それについて、私案をのべるに至らないから、ふれないでおく。歌の総数は上下巻あはせると、八一首。そのうち、一字一音の仮名表記の徹底してゐるもの六二首。次に例をあげるやうな、表意的用法をふくむもの、乃至は一字一音式表音的ならぬ用法をふくむものすべてで一九首である。このやうに、竟宴和歌においても、一字一音の仮名で、全巻を徹底的に貫くといふことは、むづかしいものである。これが、何故かといふ点に至ると、なほ、条理立つた説明を与へることは容易でない。しかし、どのやうな語を、どんな文字で書いたものかといふことは一往見ておかねばなるまい。本来は、単字の表と、語の表とを別に作るべきものであるが、ここでは簡略にしてその中間的なものを示す。日本紀竟宴和歌の、熊本本妙寺本の古典保存会複製によると、上巻はじめからの出現順に、歌では

葦牙 をす国 四年之間 解由無し からす羽
墨 見別ぬ 王つさ 君が御世 獻ける
下照姫 恋 鶴ならぬ 堤 豊浦宮 世々
水 日月 行 星躔（新羅）の国 ゆめに見し
甘樫の丘 八嶋の国 伯孫 埴に馬 作し時 器
豊 ひ女 野にも 三日はかり おとひ女 見ます
菅田のきみ 大かみ 大津父 于 大鷦鷯

また、左注（これは成立が何時か、本来のものがどうかに問題もあらうが）には

卅五歳 天皇 日のかみ 五経博士 段楊尔 大臣 皇子
王辰尔 釈迦ほとけ 経論 十八丈 聖徳太子 新羅
丈六 十二年 奏 八十七年 井 丹波 蓬萊 仙
伯孫 三日 太子

などが見えて、一字一音式万葉仮名（左註では、かな）の間に象徴されてゐるのである。

このやうな状況（先の万葉集の場合をふくめて）によつてみると、一字一音式のカナにも実は、表意文字的用法の漢字が混入してゐるのを、絶対的に回避することが、すでに不可能であつたのではないかと考へられる。また、若干の漢字本来の表意的用法をも潔く排除するのでなければ、国語の語形表記主義に反してしまふ、といふほどの強烈で、しかも狹隘な心理は元來存しなかつたといふべきであらうか。右の竟宴和歌の左註では、字音語が多く、またそれが、固有名にかゝるものをふくむ。地名については字音を仮りた表記とでもいふべきであらうが、年月日をあらはすものや、ごく少い例外（「日のかみ」）をのぞけば、多少の秩序は存したと見られよう。竟宴和歌の歌の印では、地名・人名が見えてゐて、幾分か傾向といふべきものを指摘することができるが、今は、やはり断案をひかへなければならぬ。

平安時代に入つての、いはゆる仮名文が、果して、どのやうに、漢字から脱出したか、すでにいひ古されてゐるが、漢

字かなまじり文といふよりは、むしろ漢字交り文といふのが
実況であつて（勿論、「漢字交り文」といふ用語の当否は別
として）、ここで、新らしくいふまでもない。たゞし、実況
を、多少とも実地に見ることは、この際必要である。平安時
代の日記や物語について、表記体までを精確に原型どほりに
うかがふことのできる資料は、求めても得がたいのであるが、
今、故池田亀鑑博士の労作を土台にして土佐日記及び伊勢物
語について、故新井信之氏の労作を土台にして竹取物語（古
本）について、表意的用法の漢字について、それぞれの一覽
表を作製した。

竹取物語については、古活字十行本について、山田忠雄編
「竹取物語総索引」（武蔵野書院刊）三二八頁の「おぼえが
き」に用語例二回以上で、漢字表記で一貫してゐるもののリ
ストがみえるが、左の表は、新井信之氏の古本についての調
査であるから、かなりの出入りがある。また、漢字専用の語に
は限らず、字の出現を主眼としたのは前述のごとくである。

（ア）石出 五家 入色

右大臣

枝

翁 御 御神 御身 御目

（カ）風 返 返事 神

木 木草 聞 昨日 君

草 国

子 五 五尺 五十 五百 五人心事 御覽 比

近衛

（サ）三 三年

四百 十五日 十二方 七月十五日 上下 少將 千日

千よ日

袖

（タ）竹 大 大臣 大納言 玉 給 …道

千 中將 長者

月 露 官人

手 天 天下 天人

戸 時 頭中將 所 十日 殿

（ナ）名 内侍 中 七 七十 七日 何事 也 成侍

二 二三 日 廿 廿人 二千 人 日 似

野山

（ハ）葉 花 侍 春 八千里 …波 八月十五日

日 火光 姫 人 一日 百官 百人

二 二日 二人 文

仏

（マ）申 又 松

三 三日 三月 御 御石 御子 御心 御行

身 見 水 宮

物

（ヤ）屋 山 山女

行

世 世中 夜

(う) 覧

六人

(ワ) 我 我身 王

小野 女

次に、伊勢物語、これは池田亀鑑氏の「伊勢物語に就きての研究 校本篇」の本文、定家筆三条西家本の翻字によつてみる。これも本来は、先づ単字について一覽を与へ、次に、語によつて用字を示すのが順であるが、紙幅を費すこと多いので、便宜の形で示す。大体、語を基準にして示すから、字のよみは私意によることがある。また「む月」「なが月」の「月」の類を月に一括して数へるから、若干の不備をまがれない。

(ア) 秋 秋風 雨 有 (近江 安祥寺 在原)

家庵 今色 (伊勢)

歌 内海 梅壘 氏神 右近 右大将 (宇佐)

枝

思 老 大宮人 御 御方 御時 (大原)

(カ) 賀 影 風 方 哉 河 河辺 返 返事 神 神世

狩 鷹 (河内)

木 菊 后 君 京 行幸 (す) 行者

草 草木 雲 紅 願 宮内卿 (九条)

下 (らう) 煙

子 心 心地 事 恋 衣 衣手 五丈 (五条)

(サ) 西院 桜 桜花 齋宮 三尺六寸 三条 左中弁

左兵衛督 在五中将

四十 忍 十一日 白玉 白露 白浪 白雪

住吉

袖

(タ) 田 大将 大納言 題 玉 給 谷 誰

千 千里 地 中将 中納言

津 官人 使 露 月 月日

手 殿上

春宮 藤氏 時 時世 所 年 年月 友 鳥

十日

(ナ) 名 中 流 七日 夏 浪 猶 也 内記

涙

二十丈 二条 女御 仁和

野

(ハ) 葉 許 花 春 馬場

日 火 左

吹 二日 冬 舟

螢

(マ) 申 又 松

三 三人 身 右 南 源道 水 峯 宮 御心 御名

昔 武藏

物 文徳天皇

(ヤ) 山 三月

雪 行 夢 夢地

夜世 世中 世人 吉

(ウ) 覽

六十 六条

(ワ) 別 忘草 渡 我

井

小野 女

土左日記については、池田亀鑑氏の調査（『古典の批判的処置に関する研究』第三篇）によれば、定家本で

日記 日 願 講師 一文字 十文字 郎寸 京 白散

元日 字多 子日 五色 明神 人 病者 不用 院

故 中将 子 相応寺 廿二日 廿三日 廿四日

廿五日 廿六日 廿七日 廿八日 廿九日 二日 三日

四日 五日 六日 七日 八日 九日 十日 十一日

十二日 十三日 十四日 十五日 十六日 十七日

十八日 十九日 廿日 廿一日 卅日 二月一日

とある。土左日記では、年月をあらはす語と、漢語、および固有名に大体限られてゐて、訓でよむものが少いことが注意せられる。伊勢物語にしても、たとへば「をとこ」といふ語が、「女」といふ語とほゞ匹敵する頻度で存するにかゝはらず「一度も」「男」の字で書かれてゐないといふやうな点で特異な感じが持たれはするが、平がな専用（いはゆる仮名文）とみられる表記体にも、右のやうな程度の漢字の混用はさげがたかつたと見られる。

このやうな状況の下にあつて、片仮名文が、同じ条件で、もし書かれるならば、それは、今昔物語集のやうな、表記体になつて具体化されるといふことは、甚だ不自然であるといはなければならない。すでに春日政治博士が「片仮名交り文の起源について」（『同博士著「古訓点の研究」に収められてゐる）で次のやうに結論されてゐる。すなはち、

（前略）国語本位従つて仮名本位の文は、先づ草仮名を以て書始められたが、片仮名の漸次流布するに従つて、亦この方面には片仮名が採用されるに至つた。和歌や物語にも、片仮名で書かれたもののあるのが是である。しかしこの種類の片仮名文は国語本位仮名本位であり、漢字の入ることの極めて少いものであるから、かの漢文訓点に附けられた字訓や補読の片仮名文に見るやうな同大書下しの普通体であつて、宣命体ではなかつたのである。

といふわけである。右に見て来たやうに、割合にやさしい、定着度のつよかつた漢語、固有名、頻出する語については、やさしい漢字が使用されて、その混入を意に介しない体で、かな文が表記される状況であつたのであるから、そのかなが片仮名にそのまゝとつて代られるならば、やはり漢字との比率は同様にほゞ保たれた筈である。

たとへば、片仮名本後撰和歌集田中本などの体裁がその一つの見本となるであらう。古典保存会写真複製本の解説（山田孝雄執筆）では

本書は全部墨書にして一張十行を標準とせりと見ゆ。歌は片仮名にて書くを原則とせりと見ゆれど、まゝ

「人」(最も多し)「月」「心」「花」「衣」「竹」「冬」「日」「山」「思」「棚機」等

を漢字にて書けり。又巻第九の第一首に平仮名「に」を用ゐたるあり。詞書は大部分片仮名なれど、名詞等には漢字を交ふること少からず。人名は主として漢字にて書きたるが、時に片仮名を交ふことあり。「題不知」「読人不知」「題読人不知」は専ら漢文風でかくを例とせり。

とのべて、その表記体の大略を示してゐる。ここに蛇足になるが、多少の例証を加へるならば、題や詞書では、上巻の(巻一一巻)、出現順でいふと、(重複をはぶく)

正月一日 二条 后宮 春立 日人 女月

朱雀院 御門 子朝臣 院 御返 題不知 開白

中宮歌合 山家 前栽 紅梅 又 延喜 時 同 藏人

松花 心 兼輔 宰相 法師 竹中 寛平 帰 鷹

題読人不知 衛門 御息所 侍 色 京極 行幸

壬生忠峯 左近 番長 贈太政大臣 君 朝忠 申

兼茂 娘 助信 母 敦忠 宴 亭子院 三月十日

三条 右大臣 卿 四月 藤原 命婦 女車 春宮

五月 御書の所 後 少将 五六人 大納言 賀

中納言 屏風 郭公(以上五語はイ本)

師尹 消息 六月

のやうに見えて、右の解説の趣旨が首肯せられよう。

かな文を片仮名文に転字して写す際に、漢字の部分だけはやはり、もとのまゝそつくり残されて伝承されるといふ鉄則は存しない。それは、土左日記において池田博士が統計的に示されたところである。けれども、一語一語の個別的な処理の上に立つ、一文章一作品の表記体についていへば、たとひ転換が行はれても、かな文から片仮名文への移行には、漢字に関する限り大きな変動があつたものとは認めがたいのである。今、この、かな文から転換せしめられて成立する片仮名文を和文脈系片仮名文と称するなら、今昔物語集の片仮名文は、(これは、一往本朝の部もふくめて)、明かに異質のものであり、春日博士のいはれることは誤りが無い。しかしこの際に、三宝絵詞の三種の表記体の間の関連を想起しなければ十分ではあるまいと思ふ。三宝絵詞の東大寺切はかな文、観智院本は上巻が片仮名宣命体、中巻下巻が片仮名文であり、前田本は、いはゆる真名本で、変体漢文の、漢字文である。この三種の表記体の併存については、後日にのべたい。

さて、右ののべて来たところから、どの表記体によるにせよ、表記体の首尾一貫を、嚴格に求めるといふことが、実況からみて、かなり困難であることだけは、右煩を厭はずに挙げた諸例によつて了解されるであらう。ことに、万葉仮名やかなが、一般に表記体において有する意義は、一律に定めがたいこともほゞ想像されるところとなる。かなばかりで専ら書記しようといふ時でも、字音語については、やはり多少の抵抗が生じるし、伝統的な用字法の固定した語について

は、他の字面と調和しなくても、伝統的なものを尊重するといふ位の事情はあつたものと見るのが自然ではないかと思ふ。今昔物語集の宣命書きでも同様のことである。したがつて、今昔物語集天竺震旦の部に見える概念語の片かな書きの部分の表記の裏にある、書記者の意識を探索するに当つても、用語の性質との内面的関連の存否をのみ、主たる課題とすべきや否やを慎重に考へるべきものと思ふのである。

四、本 論

——今昔物語集の宣命書きの場合

今昔物語集の宣命書きが、古代の真仮名の宣命書き——先に、続紀宣命についてみてきたが——の嫡々の末裔ではあるまいといふ考へは、すでに春日博士によつて、行はれてゐる。(前引論文)

「訓点仮名發達に伴つて新しく創められた宣命体である」と見る方が妥当ではなからうか。たとひその様式は真仮名宣命体から得來つたとしても、少くも両者は別途に流れてゐた。それ故真仮名宣命体に略体仮名の混入する遙か以前にこの片仮名交り文は成立してゐたのである。さてこの文体の起源の仏儒の漢文に因縁してゐることが、この様式をして漢文に係し従つて漢字を多用する文、換言すれば、漢字本位の文の方面に長く流れしめた所以である」(傍点は本稿筆者)

といはれてゐる。東大寺諷誦文稿の、宣命体について、博士

は、「古訓点の研究」において、追補せられて、ごく初期の資料として、金光明最勝王經古点や、金光明最勝王經注釈(飯室切)古点より溯るものとされるが、右の考へ方に立つてみると、今昔物語集の宣命書きは、続紀宣命や、延喜式祝詞などに見られる、すでに表記体の様式として定着したものの發展や展開とみるべきものではなくて、むしろ漢文訓読の習慣から別に生じてゐたものであらうといふことになる。(ただし、この考へ方では、古代の真仮名宣命書きの源流については、別の考へ方をすべきものであるかどうか不明である) したが、右の考へ方にも、多少の間隙が存する。表記体といふものは、転換しうるものであり、それが時代の流れに従つて伝はれることもあり、同形が同時に行はれることもあらう。春日博士の御説の要点は、漢文訓読の場から出たといふ点よりも、むしろ、その地盤に立つて行はれた一種の注解、したがつて、自作の文章に、宣命書きが採用されたといふ所にある。漢文を訓読する際の、傍訓を付することと、注解といふ作業とは大きくいへば一連の作業の部分と部分との關係に立つものであるが、前者は読み解く点に主眼があり、後者は、解釈の結果を、自己の思想文章として表現する点に主力を置く。そこに大きな分岐が見られる。

今昔物語集は、天竺震旦の部では、出典・典拠とみるべき文献の先行を前提としなければ、不可解とみられる行文が少くないが、おそらくは、右にいふ漢文の訓読(傍訓を付すること)と、その解釈といふ作業が、多くの場合存して、しか

る後に潤色せられたもの（注解の表現）が多いのであらう。続紀宣命の表記様式の直接の模倣や展開とみるべきではなくて、本来、漢文からの転移において、第一次的な、固有の、時代性を超越する様式といふ風に見るのがおだやかではないかと考へられるのである。本朝の部における、異質的なものの混入は——つまり、出典や典拠といふべき文章が、必ずしも漢文でないといふこと、また口承説話であつたりすること——表記体の様式を、かなり変へさせる機縁になつたと思はれ、同時に、用語についても、似た様な問題があらうと思はれる。

ここで、近時全貌の紹介された、山口光圓氏蔵の「草案集」を考へ、また金沢文庫蔵の佚名仏教説話集を考へるのが適切であらう。

さて、今昔物語語天竺震旦兩部において、例外的表記法とみられるものに概念語の仮名書きがある。その例は次のごとくである。今、それを、語によつてまとめ、その出現の場処を示し、全体を五十音順に排列して示すことにする。先にのべたやうに、新訂増補国史大系本によるから、大字小字の書きわけが明かでない筈であるが、芳賀矢一氏考証本によつて一通り裏付けを行つた。しかしこれには多少の原本との相違も考へられるのであり、また大系本と芳賀本との相違も存することを注意しなければならない。たゞ、ここでは、実は、大字仮名書きに限らず、宣命書きの一体としての今昔物語語における概念語の仮名書きといふ点に、むしろ注意を向けてゐる

ので、その点は、緩く考へてゐるのである。語の下に（ ）を付した数字をもつて、巻の序次と、語の序次を示す。下に芳賀本における異文を示す。

（ア）

。アカラ目（五ノ14）

。アサデ（十ノ7）

。アデキ無キ（一ノ14）

。アテナル（五ノ30）

。アナカマ（一ノ12）

。アマヘテ（五ノ30）

。アラム（十ノ11）

。アリケル（一ノ10）

（芳賀本「有ラムト」）

（芳賀本「有ケル」）

。イザ（五ノ25・25）

。イタツテ（一ノ25）

。イデ（二ノ33 五ノ25）

。イマダ（一ノ六）

。イミジキ（五ノ4・19・32 十ノ32）

。イミジク（五ノ4）

。イミジカルベキ（四ノ35）

。イラ、カシテ（五ノ20 十ノ15・15）

。イラ、ケテ（五ノ20・20）

（心）ウカルベキ（四ノ35）

。ウカレタル (十ノ32)

。ウチ (十ノ34)

(芳賀本「内」)

。ウツホ (四ノ11)

。ウツロ (四ノ11)

。ウナ垂テ (四ノ17・17)

。ウナヅク (五ノ3)

。ウラヤミタル (二ノ16)

(芳賀本「ウラヤミタル」)

ウレシキ (三ノ11)

ウレシサ (五ノ19・19)

。オボロケニテハ (四ノ17)

ヲボロケノ (五ノ32)

(芳賀本「ヲボロケノ」)

カハツリ登リ (四ノ25)

カゝル (二ノ12 二ノ24・26・28・30・以下略)

カク (二ノ9・12 二ノ16・24・33・33 五ノ17・17・17 以下略)
(芳賀本卷二の26・28・30を缺く)

カクテ (二ノ10・32 二ノ23・23・24・30・30 以下略)

。カシコニテ (五ノ25)

。カシコマテ (三ノ11)

。カラミテ (四ノ6)

キラメキテ (十ノ28)

。ケカラ女 (五ノ4・4)

コソメク (五ノ19・19)

コノ (九ノ19)

。コレハ (五ノ19)

サニ (十ノ32)

サコソト (二ノ31)

サテ (二ノ5・13・17・29・29 二ノ26・26・26 四ノ3・33
五ノ27)

サニコソハ (三ノ11)

。サラニ (十ノ34)

サラメキ (十ノ36)

サリトモ (二ノ12)

サル気 (十ノ34)

サルハ (二ノ11)

サレバ (二ノ12・13・15・30 二ノ19 三ノ6 五ノ1)

シダリテ (二ノ3)

。(:ニ)シテ (二ノ9・9)

シバシ (二ノ37)

(追ヒ)シラカヒテ (五ノ1)

(心)シラヒテ (二ノ26)

(引キ)シロヒ (五ノ1)

(曳)シロフ (三ノ22)

。(…ト)ス (二ノ32 二ノ28・28)

スダケリ (九ノ34)

。スミヤカニ (二ノ25)

。(…ト)スル (二ノ31・34 四ノ40)

。(…ム)ズル (二ノ32)

。(…ト)セル者 (二ノ5)

。ソコノ (九ノ13)

ソ、ロニ (二ノ11)

。タマ (十ノ12)

タドルタドル (六ノ6)

タメ (十ノ30)

。(名)ツク (二ノ15)

ツクツクト (十ノ6)

トカク (四ノ4)

トロメキテ (四ノ31・31・31)

ナグサメ (三ノ11)

。(舌)ナメツリ (三ノ11)

。(…如ク)ナラム (二ノ3・3)
ニコ、ニ (四ノ6)

。ネデテ (十ノ12)

ノドカニ (五ノ32・32)

。ハウニ (四ノ24)

ハシタ無ク (二ノ12)

。ハヅシ (十ノ15)

(取)ハヅシテ (二ノ26)

(箭ヲ)ハズシテ (五ノ18)

ハラハラト (十ノ35)

。ヒタ迎へ (十ノ31)

。ヒタブル (五ノ1)

ヒラヒラトシテ (三ノ11)

ヒラメクニ (三ノ11)

。フクレテ (二ノ3)

。フルマイ (二ノ3)

。マサシク (十ノ1)

。マヅ (十ノ15)

。ムツカシキ (四ノ八)

ムツカシク (三ノ11)

。メデズ (五ノ4)

。(此ヲ)モツテ (三ノ30)

。モトロカシ (四ノ12)

。ユスリ上テ (五ノ4)

。ユヘ (二ノ27)

。ワナ、キ (五ノ4)

ヲビタ、シ (五ノ1)

。ヲモネラズ (二ノ3)

右にあげた諸項は、語の性質からみてどのやうなものであらうか。その研討に先立つて、今昔物語集における表記の秩序の整齊について一言したい。右にあげた諸項は、天竺震旦の部において、数多いものとは決して云ふことができない、いはゞ例外的現象である。たとへば、次のやうに明かに他の処では漢字で書かれてゐるというやうなものがある。

名ツク——名附ク (二ノ9・14)

また、これは、「名」の字を動詞「ナツク」として用ひ、そのおくり仮名(または捨仮名を交へて)を「名ツク」と書いたと見られぬことはない。次のやうな例、

嗚呼ガマシク

は、芳賀本では

嗚呼^{ガマ}シク

であるから、例外にならないとみられようが、実は「ガマシク」の部分を取名書きにしたことについては注意を怠つてはならない。これは

穢ナミツルハ (四ノ9)

触レバフ (四ノ6 十ノ26)

と同一に扱ふべきものであらう。後の二例も仮名書きの部分の多い——送りが多いことには意味があるやうである。

「嗚呼ガマシ」の場合、すでに「ヲコ」を「嗚呼」と表記することに一つの宛字が行はれてゐるが、「ガマシ」の部分には、適切な宛字も行はれ難いのであらう。とにかく「ヲコガマシ」の語は、辞書にも示すやうに、源氏物語を始めとする和文の系統には見える語であるが、漢字字書ならびにその系統に立つ辞書には姿をあらはさない。三巻本色葉字類抄オの部の疊字門には

嗚^{言語ア}惜^{オコ}

嗚呼^同オコ

が見えるのが僅かに近い。しかし「ヲコガマシ」は見えない。同様にして「穢^{キタ}ナミツル」の語も、また、「触レバフ」

の場合も、何らかの事情を想定することができるとはでないか。或は和文脈の語か、或は新登場の俗語か、或は擬態・擬声の語かといふ点で、型を分類することができるとはいいかと考へられる。

そこで、先づ、擬声語擬態語と思われるものを一括してみる。

キラメキテ	ニ、コ、ニ
コソメク	ハ、ハ、ハ、ハ
サ、ラ、メ、キ	ヒ、ラ、ヒ、ラ、ト、シ、テ
トロメキテ	ヒ、ラ、メ、ク、ニ

「ニコ、ニ」は今昔物語集一本に「ニフフニ」の傍書があるが、それならば万葉集にも例がある。「ニココニ」の本文をとるなら、名義抄などは「輾然」「輾然」や「覓尔」の字をあげ、後者には文選読のあつたことを示してゐるから、伝承ある擬態語とみられるから別扱すべきであらうが、一体に擬声語擬態語は、後のいはゆる真名本などでは、多く宛字の行はれるところであつて、それが理由も、適切な、オーソドックスな漢字表記の慣習の成立ちがたいところから、やむを得ざるを奇貨として、逆に機会を活用するの技巧として生れたものであることを考慮すると、今昔物語集における、大字の仮名書きは、むしろ自然といはなければならない。それは、愚管抄の著者の意見でもやはり同じことになるであらう。

次に、文字的場面に新登場の語といふべきもの。特に漢字

表記の場面といふことになると、和文脈の語もしばしは、漢字表記を新らしく行はざるを得ないことがあつたであらうと思はれる。

アサデ	イミジキ（一ク・一カルベキ）
アテナリ	イララカシテ
アナカマ	イラ、ケテ
アマヘテ	（心）ウカルベキ
イデ	カ、ル
	カク
	カクテ
	コノ
	サ（一コソ・一テ・一ニ・一ニコソ）
	サリトモ
	サル（一氣・一ハ）
	サレバ
	シダリテ
	シハシ
	シラカヒテ
	シラフ

(ヒキ)シロフ

スダケリ

ソゾロ

タドルタドル

ツクヅクト

トカク

ナクサム

ノドカニ

ハシタナシ

ヨビタ、シ

右にあげた諸項の根幹をなす語は、今、類聚名義抄訓索引を借りてみるに、見当らない語である。而して、その大部分は源氏物語の語彙である。たゞ「ヨビタ、シ」の如きは、源氏物語にも見えない。この「ヨビタ、シ」については、小稿「真名熱田本平家物語の漢字とその用法の一側面(二)」(本誌第十二輯)のうち(92頁以下)において私案をのべて置いたから、ここには詳説しないが、同様のことが、云ひうる場合が外にもあらうと思はれる。右あげた、和文には見え、漢文訓読に乏しいと思はれる語では、漢字表記の慣習の未熟や、不成立ということから、仮名で書かれてしまふ場合が多く存したものではないかと考へられる。

舌ナメヅリ

ネデテ

ムツカシキ

などの場合でも、「舌ナメヅリ」は、字鏡集に「狎」字の訓として存するが、名義抄のその字にはその訓見えぬのみか、一体にその語を訓として有しない。実用例として大日本国語辞典などでは、この今昔物語集の本朝部、巻十四の第三の例「頸ヲ持上テ舌嘗ヅリヨシテ」(新訂増補国史大系本による)

をあげてゐるのみであり、大言海には、宇治拾遺物語をあげる。今昔物語集が、この語の初見であるとすれば、院政時代の時代語であるか、または、従来俗語であつたものが、文字の場面に初登場したものか、いづれかと考へるのが自然であらう。「ネデテ」については、大日本国語辞典に、宇治拾遺物語の

鬼よりて、さはとるにとて、ねちてひくに、大かいたき事なし (岩波文庫本上巻、上本一、第三)

を引き、大言海は、今昔物語集本朝部巻二十三の第十五から(実は第十六でなければならぬが)

季通門ノ許ニ走り寄テ、門簾ヲネデテ引ケレバ引拔タリを加へてゐて、この語も、辞書で見える限り、今昔物語集を初出とする。

「ムツカシ」の方は、名義抄に
憤懣 ムツカシ (法中ノ第九五面)

の一例があり、三卷本字類抄には、黒川本(前田本にこの部を缺く)で

蟲 ムツカシ 悱懣 己上同又
難羅減任那

と見えて、語が見えるのであるが、もとより和文脈には珍らしからぬ語である。下学集などで「六借」の字をあてたのを登録してゐるのは、先縦を、十卷本伊呂波字類抄にも見るから、さしてあたらしい宛字ではないであらうが、和文脈の方に、本籍が存したやうに見てもあやまりではないであらうと思はれる。

右のような見解をもつて見てゆくと処理できる項目が存することは、ほゞ明かになつたと思ふが、更に、それをひろめてゆくと、

オボロケ

名義抄に「少」(僧下七五)の訓として一例。

字類抄は三卷本・十卷本とも、やはり「少ヲホロケ」のみ。恐らく名義抄と同源か、または名義抄を引くのであらう。和文には決して珍しくない。

カ、ツリ(登ル)

この語は、連用形がイ段に属すると見られるから、恐らく、ラ行四段活用の語であらうが、辞書に登録がない。この今昔物語集のこの箇所を初見とみることもできるであらう。

ケカラ女

これは、恐らくは、その説話の行文からみて、いはゆる緊那羅(キンナラ)に相当するものであらうが、漢字の字面からの遊離の後の、謬伝の姿と見ることができないか。

ハウニ

これは「白粉」をさすから、当然「白粉」の字面をあててもよかつたと思はれる。元来は「ハーフニ」であるが、音変化の後には「ハウニ」で、本草和名・和名抄にも見える。この語の見える今昔物語集の説話は、打聞集にも見えるのであるが、やはり仮名で「ハウニ」とある。ところが、この説話の文脈は、

粉ヲ多ク召テ宮ノ内ニ隙無ク蒔ツ。粉ト云ハハウニ也 (今昔物語集)

粉ヲ召テ宮ノ内ニユキノ降タルカ様ニマキツ。粉ト云ハハウニナリ (打聞集)

とあつて「粉」といふものの説明を詳しくのべてゐる場所である。むしろ仮名でなければあやしいわけである。あたかも、記紀の訓註のごときものである。などの場合も視野に入つて来る、多少の理由をまとめ得たといつてよいであらう。

しかし乍ら、なほ多く、説明し難いものが残る。恐らくは宣命書きといふ表記体にも、それが意識的に採用される場合でも、多少の弛緩はまのがれがたかつたといふより外にない。けれども、また、

カク、カ、ル、カクテ

の類は、

カクノゴトク、カクノゴトキ

が「如此」とかゝれるのに、何故にか仮名書である。これも

古い宣命に立かへつてみると、

加久 可久

の字面で書かれるのが通例であつたことを思ふと、一脈の共通点が見出され、したがつて、そこに伝承といふ關係が、成立つてゐたとも見られよう。しかし「此」の字は、名義抄で見ると

コレ ナムチ ソシル イナ

(法上九九)

コ、ニ コレ

(僧下六九)

の訓が見えるものの、カク・カクシテ・カ、ルには

カク ス

カクノゴトキ

若斯 夫然

カクテ (ナシ)

カクノゴトク

若時 寔 茲 若茲

カ、ル ス

カクハカリ

如猶 若 如是 斯

只且 且

とあり、今昔物語集で

如此——カクノゴトキ・ゴトク

カク——カク

の表記の見られることに矛盾はしないが、格別に何も与へない。「如此」「如是」を「カクノゴト_シキ、ク」とよむ習慣があるので、その文字面をとるのが自然だが、「カク」「カクテ」には、そのやうなむすびつきが存しなかつたとみるより説明ができない。万葉集の字面では

可久・加久・加九・迦久・加苦

などの仮名書きも少くないが、一方

此 是 如 如此 如是 各

の表記の例も少くない。万葉集の例にはなほ訓読の問題が有りうるけれども殆ど問題になるまい。今昔物語の「如此ク」の字面の訓読を、すべて、「カクノゴトク」とするなら、「カク」はすべて、仮名書きになつてしまふ。その点からすると万葉集の書法の伝承が、順調に、宣命書につたへられてゐるとはいへまい。むしろ、漢文訓読の場に近くあつたといつた方が無難であらう。しかし、それを、続紀宣命の用字まで連関を求めて行くのは、飛躍といふべきであらう。たゞ、そこに、類同の現象が存するといふのみである。

今昔物語集の、天竺・震旦の部は、いはゞ原作ものの原作ばなれとでもいふべきものである。原文からの脱出、出典からの独立を、多少とも考へ、平易な読物としての成功を狙ふならば潤色といふ点では特別の配慮がなされなければならない。

前にのべた擬音語・擬態語の類や、時代語・俗語の類はその潤色の一つの手段に用ゐられたものであらう。自然な、そして俗耳に入る、躍動する描写の爲には、後の平家物語が同様の例であるが、日常性、あるいは俗語的エスプリが必要になるのである。それは、本来の典拠の漢文においてさへ、当然あり得る筈のものである。遊仙窟のような閑文字であれば、直ちにそのことは指摘することができよう。

そして、それらは、もし、そのスタイルを全体的に固執するなり新しい器の用意ができるまでは、仮の器に盛られた。新造字・宛字のできるまでは、——できたものは順にそれぞれに盛られて行つたが——仮の字でよそはれたのである。